

	<p>小論文</p>	<p>十四時三〇分～十六時〇〇分（一時間三十分）</p>
<p>問題文は、二枚目以降に記載（ただし、試験開始の合図があるまで見ないこと。）</p>	<p>注意事項</p> <p style="text-align: center;">■試験開始前の注意</p> <p>一．試験開始の合図があるまで、この問題用紙の二枚目以降を見ないこと。 また、解答用紙にも手を触れないこと。</p> <p>二．受験票は、監督者から見えるよう机上札の横に置くこと。 受験票を忘れた場合は、受付で仮受験票の発行を受けること。</p> <p>三．筆記用具以外の筆箱・ペンケースなど、私物はすべてかばんの中に片付けること。</p> <p>四．試験用具の貸し出しは一切いたしません。</p> <p>五．携帯電話を使用することは、時計・アラーム等の用途を問わず、禁止します。 必ず電源を切り、かばんの中に入れてください。</p> <p style="text-align: center;">■試験開始後の注意</p> <p>一．試験開始後、問題用紙および解答用紙類の印刷不鮮明な箇所、落丁、乱丁、汚れ、不備などに気がついたら、手を挙げて監督者に知らせること。</p> <p>二．解答用紙裏面の所定欄に解答用紙記入番号・氏名を記入すること。</p> <p>三．試験開始後は、試験終了時刻まで途中退室できません（お手洗い等を除く）。</p> <p>四．質問がある場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。質問は試験終了十五分前まで受け付けます。それ以降は受け付けません。</p> <p>五．試験中にお手洗いを希望する場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。 その際は、他の受験生の受験を阻害しないように注意すること。</p> <p style="text-align: center;">■試験終了時の注意</p> <p>一．試験終了後は、問題用紙のみ持ち帰ってかまいません。解答用紙を提出せず に持ち帰った場合は、試験放棄とみなします。</p> <p>二．試験終了後は、受験票その他の忘れ物に注意すること。</p>	
<p>用紙</p>	<p>（問題用紙）本冊子（本紙を含む） 三枚 （解答用紙）原稿用紙 一枚 （下書用紙）A4白紙 一枚</p>	
<p>使用可能用具</p>	<p>筆記用具（鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り）</p>	

【問い】

以下の文章は、『大学生の論文執筆法』（石原千秋 著／筑摩書房／二〇〇六年）からの抜粋です。

- (一) この文章を読んで、筆者の考えを三〇〇～四〇〇字でまとめなさい。
- (二) あなたの身の回りに引かれた「線」を浮かび上がらせ、その「線」についてあなたなりの考えを三〇〇～四〇〇字でまとめなさい。

解答用紙は、縦書きで使用すること。

【課題文】

僕たちの思考は、線を引くことで成り立っている。いや、僕たちの世界は線を引くことで成り立っている。

線を引いたり、消したりするのは文化の仕事だ。しかし、文化は着ていることさえ忘れてしまった衣服のようなものだから、文化によって引かれた線はふつう意識されていない。空気のように自然なものだと感じられている。また、気づかないうちに線が消されてしまったりもする。そういうことを意識化するの、知性の仕事だ。

文化によって線が引かれたり消されたりすることをあえて意識化するには、新たに線を引き直すか、すでに引かれた線を消すか、それとも線を引いたことでできた差異（差別）を問題にするか、いくつものやり方がある。僕がそういう仕事にはじめて接したのは、懐かしき一九七〇年代から八〇年代に流行した、ニューアカデミズムと呼ばれる知の世界の運動だった。

たとえば、ニューアカデミズムの旗手たちは、それまで西洋的知性の根拠となっていた「精神」重視の発想を、「身体」重視の発想に転換して見せた。これは、精神と身体との間に引かれた線が身体を差別してきた歴史に異議申し立てをしたのである。差別されてきた身体の側に立つことで、精神と身体との間に引かれた線を浮かび上がらせたのだと言ってもいい。

彼等はさらに、精神と身体とは別々のものではなく、ひとつながりのものであると主張しはじめた。そこで、「精神としての身体」という言い方が生まれたのである。これは、精神と身体との間に引かれた線を消して見せたのだと言っていい。そんな風にして、彼等は次々と線を浮かび上がらせ、それまでの価値観をひっくり返し、線を消していった。大人と子供では子供の側に立ち、意識と無意識では無意識の側に立ち、正常と狂気では狂気の側に立ち、文明と野蛮では野蛮の側に立ち、男と女では女の側に立ったのだ。それは目眩めまいがするほど知的で軽やかな仕事だった。

(中略)

線を引くことで物事がはつきりすること、線を引くことはさまざまな差（ある場合には差別）を生み出すこと。そして最も大切なのは、線はどこにでも引くことができるし、それを消すこともできるということだ。もちろん、現実には実社会で新しく線を引いたり、すでに引かれている線を消したりすることには大変な努力や犠牲を要することがある。たとえば、アメリカで白人と黒人との間に引かれた線を

(少なくとも建前上は) 消すことに、いったいどれだけの命と、どれだけの時間が必要だったことか。しかし、知性はそれを軽やかにやってみせることができる。いや、それが軽やかにできないようでは知性とは呼べない。知性はすでに実社会において引かれている線をいとも簡単に消したり、いとも簡単に新しい線を引いたりすることができる。それが、特にこれからの社会で求められる発想の柔軟さというものだ。

すでに引かれている線を守ろうとするのは保守派のすることだ。もちろん、保守派が常に非生産的だなどと言いたいわけではない。すでに引かれている線を守らなければならないときもある。しかし、その基準は個人によって異なっている。だから、対話や議論が必要になってくる。そのときに、その基準それ自体について対話をしたり議論をしたりすることができるのもまた知性の仕事なのだ。なぜなら、知性は線を自由に引き直すことも、消したりすることもできるのだから。

知的でない人間は、対話や議論を拒む。「いけないことは理屈ではなく、有無を言わずいけないと教えないければならない、それが品格というものだ」などという人間に知性は存在しない。こういう知的でない言説が大衆受けするのは、「いけない」ことの内容を自分で勝手に代入して、現在の自分の立場を無反省に正当化できるからにほかならない。これが大衆の保守化である。平成大不況の中で疲れ果て、知的に考えることが面倒になってしまったのだろう。しかし、何度でも繰り返すが、そこには知性はない。